

数通流茂遠志(四)：先達の通信教育

中野, 三敏

<https://doi.org/10.15017/4742039>

出版情報：雅俗. 14, pp.159-165, 2015-07-17. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：



数通流茂遠志（四）

—先達の通信教育—

中野 三敏

これから差出人別にまとめて記す事にする。

横山重翁（一）から（五）迄は私の名古屋住時代。（五）と（六）は九大時代。

（一）葉書

近世文芸叢刊（中尾発行）といふもの、おとりになられましたか。もし御とりになっておいでなかつたら、私の許で重複したもので、貴兄にさし上げたいと思ひますので、ちよつとお伺ひします。私は野間さんから全冊貰ひます。彼の歌に「時のきざむ、かばかりせちに、くるしとは、おもはざりしを、むそじありへて」。そして、各分担の方々（祐田と木村）からも、その各冊を貰ひます。二十三日、森川夫妻、お別れにおいで。心細くなると家内がいふと、もう一度来て下さると。

三月廿四日 横山重

近世文芸叢刊（中尾発行）といふもの、おとりになられま
しな。もし御とりになっておいでなかつたら、私の許で重複
したもの、貴兄にさし上げたいと思ひますので、ちよつ
とお伺ひします。

私は野間さんから全冊貰ひます。彼の歌に「時のきざむ、
かばかりせちに、くるしとは、おもはざりしを、むそじありへて」
そして、各分担の方々（祐田と木村）からも、その各冊を
貰ひます。

二十三日、森川夫妻、お別れにおいで。心細くなると家内がいふ
と、もう一度来て下さると。

三月廿四日

横山

重

（二）葉書

小学館の第三出版部から御作の本送ってくれました。堂々たる本。
御担当の分、チラチラと一見。よく初板原装本をさがし出されまし
た。これ、中々に及び難きところと拝見しました。

鈴木棠三氏、今度で三度来訪。その旅に私の本を買ってくれるので、近ごろ私も、やや楽です。彼氏の本（東京堂）は、いくつも、数十版と。私は当地へ来て、新刊八、再刊十五なれば、印税もらひしは、琉球神道記一冊ノミ。で今後も、彼に期待して、老後をくらす。

五月六日 横山重

(三) 葉書

本日、祐田善雄さんから、近世文芸の絵入り狂言本の下巻を寄贈してくれたと、たよりあり。小包はマダ。上巻を貴兄にさし出してあつたやうに記憶？すれど、どうか。上巻が貴兄の許へ行つてゐると、下巻を上げたいので、返事ください。記憶がアイマイなので、一応、御問ひ合せします。

全揃ひは野間さんから貰つて、私はあるのです。

若狭の珍品、一切だけ、北条秀雄君にさし上げました。蜂蜜、重宝してゐます。いろいろに使つてゐます。

(四) 葉書

只今（二十六日午後三時半）小鯛さ、漬二ツ、拝受いたしました。昨日、お知らせして貰つたけれど、葉書ないので、広告の紙で、御礼申上げました。ありがたう存じます。大そうおいしいと（今から）予想します。今日は北海道から新巻を貰つた（北大の野田）ので、何から何まで、頂戴もので越年できます。着物まで頂戴ものです。感謝いたします。蜂蜜も時に頂戴してゐます。

十二月廿三日夕 横山重

(五) 葉書

昨十八日、わざく高野大師三、お馬じるし一を、お届け下さいましたこと、御足労相かけ、相すみません。又、その節、大したものの御恵与くださいまして、感謝。昔、私は熱海の山中で、一日かけて、山の芋をポツチリ掘つて、古屋旅館へ持つと行つたことあり。ほめられました。その旅館の二男（英文科）の結婚のバイシヤクをたのまれたが、辞退して、それは戸川秋骨先生にたのみました。四十何年前のことです。

(六) 葉書

又々、御地の名品、御恵送下しおられました御事、感謝に存じます。私は運動不足（足腰萎へて歩行できぬ）とて、食欲がないので、頂戴のもので、やや食欲が出ます。ありがとうございます。

御労作つづいて出ます。これ並大抵の御作にあらず。生涯的の御作と存じます。まづ御養生あつて、御長命を願ひ奉る。

一月廿二日 横山重

(七) 葉書

大兄、九州へ赴き玉ひしゆえ、九州の名品を、屢々頂戴いたしました。ありがたう存じます。本日、万玉の鶯宿梅をいただきました。鹿島大治さん夫婦とその娘の晴衣の三人、パリへ行きて帰りしとて、元気で話しに來ました。あまり遠きことにて、さして羨しくはなし。○美ノの久々利の陶芸家、吉田喜彦氏、丸栄にて個展あり。私は藤園氏と共に行きたれど、めぼしきものは赤札になつてゐまし

た。こんなものでも、衆目は案外一致してをり、出足の早いと遅いとで、勝敗がきまると思ひました。本も同じらし。

(八) 封書

只今、御手紙と、三田村さんの御文、又もう一つの文章の複写ありがたう存じます。

大兄、松竹梅を得られしと。これ稀本。いそがなければ、私の本の題簽のゼロックスをさし上げます。原本は前田君の許へ行つて、十余年です。私の本は平瀬家から出たもの。

男子御出生と。これからが又大切と存じます。世の中の事、皆、順送りです。

野間夫人、九月十四日に急逝と。その前に、二三の人から知らせてくれたが、命日を知らせしは北条秀雄さん。この土曜日(二十一日)島津忠夫さんが来て、や、クハシク教へてくれた。で、私ははじめで、追悼の葉書を書きました。

人間はいつ、どんな不幸に逢ふか分りません。

野間さん、女兒四人ありて、三人は他へ嫁せしめ、目下三番目の娘、自宅から銀行員として通勤し居れりと。で、人間としては十分役目を果たしてゐます。私は兎なく、それで苦勞なし。

遠近道印は、三田村さんよくやつてあり、敬服しました。今まで、正當な学者(三田村、栗田、幸田先生)は、多く幕府側の史料を見て、幕府↓北条安房守に中心をおいてゐる。私はそれよりも、地図そのものを見て

北条安房守↓(図工) 遠近道印

といふ關係に中心をおいて考へて来ました。

私はもう一度、もつと詳しく遠近道印について書いて見たいと思ひます。

中公は吉田小五郎さんに「丹緑本」をやらせるらし。吉田は色彩ずりの再現に力を入れるらしけれど、私は小数の口絵で、それは立派にして、多くは普通の白黒で、残さず網羅主義を可としてゐます。中公は何と判断するか、吉田さんの手紙によると、中公の山崎さんと同行して、私の許へ来ると。

色彩の出し方、実にむづかしい。原本に合ふやうな色を出すこと至難です。それに費用も高くつく。で、実情は、私説の方よし。

月販で、私の丹緑本「竹生嶋の本地」を第二期に複製するよし。これも、ウマク行くか、どうか、むづかしいのは、その色です。

道印の複写ありがとう存じます。感謝。

十月廿三日 横山重

中野大兄

※ (二)の初版原裝本についての部分、これは横山翁の再三口にされる所で、そうした本を搜して来るのが何よりだという事。

又、鈴木棠三氏は洒落言葉や回文や諺の研究家で、達意の文章で、分り難い所を丁寧の説明されていた。その人が横山家の古書を

買ってくれるという事を、アケスケに仰言るのは私もかなり信用されていたというものか。

(三) (四) はいかにも私が贈りものをする事によって横山家の古書を分けて貰えるかと思っていたようにもとられ兼ねないが、実際はそうではなく、犬山時代の先生の生活ぶりが余りに痛ましく、かつてその豪勢な生活ぶりを経験しておられるだけに、少々御氣の毒に思えていたのだった。横山さんの御本は大本の立派なもので、私が欲しいのは洒落本の様な小ぶりな本なので好みが余りにも違いすぎて、結局横山家の本は全く見る事が無かった。

(四) の高野大師行状起や御馬じるしの事は全く記憶にないが、多分藤園堂から頼まれたものを御届けしただけだったのではなからうか。戸川秋骨先生云々も横山翁の華麗な交際ぶりが際だった所であらう。

(六) の長男出生云々は、それ迄十年ほどかかっていたのが、九大赴任の報が届いた直後に出生が決まって、家内も安心したのだと思つた。野間先生夫人の急逝云々は先号か先々号にも記したと思うが、先生の絶唱があつて、それでも良く憶えている。

(七) の三田村さんの原稿複写依頼も、こうした事をちよくちよくやっていたものと思う。その内容は後文により、遠近道印の事だったらしい。「前田君云々」の一節、横山翁の持論で、「本は本当にそれを理解しているものの許にあるべきだ」というもの。その為、元禄以前の御手持ちの本の大部分が前田金五郎氏の手許にあり、それが当時で百万円を越すのだから、火事が一番心配だとは前田氏の述懐であつた。

野間先生の四人の女兒の話、三番目の御嬢さんは河原町の日本銀行社員で、御くやみに上つた時、「父はマンシヨンの窓から賀茂川を眺めて、とても喜んでおりました。本当に(体重が)軽かつたんですヨ」と仰言っていたのを思い出す。

「遠近道印についてはもっと詳しく書いて見たいと思います」云々は確か御書きになったものが「三田文学」か何かにあつたように思う。

「丹緑本」云々は、これも横山翁の持論で、「印刷では原本の色は出ない」というものだった。これは確かに僕自身もB社で確かめて実感した。

(五) の「パリは余り羨しくはない」云々は、まだ当時のヨーロッパに日本の原本の尤品がたくさんあるという事は、さして評判にもなっていなかった頃の事なので、流石の翁も羨しくはないという述懐となつたものか。

木村三四吾先生 (一) から (三) 迄は私の名古屋時代、(四) は九州。

(一) 葉書

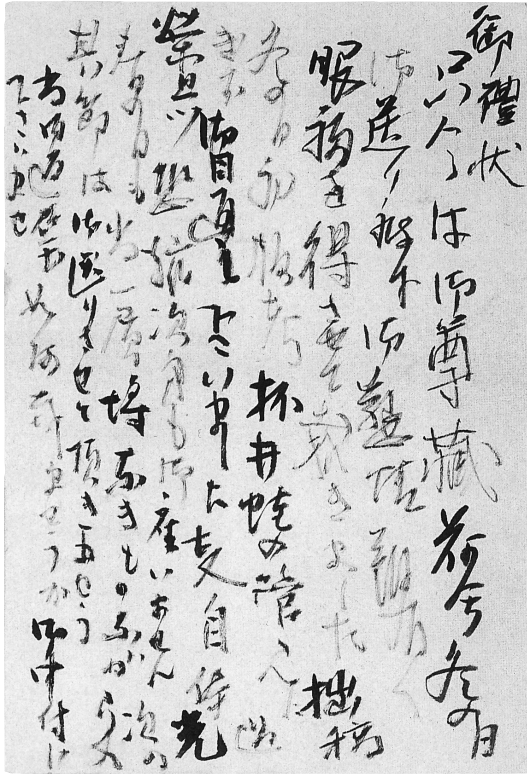
旧年御来館の節は御厚情に甘えて大変厄介な御願ひごを申し上げ、誠に恐縮致して居ります。先日横山さんの方からも御査取下さいました旨。御通知がありました。年末年始御用多のところを本当に難有うございました。先は御礼迄に。草々

(二) 葉書

御礼状

只今は御尊藏荷兮「冬の日」御送り被下、御懇情難有く眼福を得させて戴きました。拙稿「冬の日」初版考杯、井蛙の管見に過ぎず、御目通し下さいました事自体、光栄且つ恐縮次第も御座いません。次の其節は御送りさせて頂きませう。

尚御返璧如何致しませうか。御申付け下さいませ。



(三) 葉書

御返璧「冬の日」御查收下さいました旨拝誦、安心致しました。御尊秘本についての愚見、ビブリアにて「冬の日」補説として披露させて

戴くことに致しました。其節改めて御高見を承れば幸甚と存ます。

(四) 葉書

御礼状

新涼到来愈御筆硯御繁昌御様子大慶に存じあげます。

供本には御刷物二部、傾城買二筋道板本考と見立絵本の系譜、計二冊御恵与難有御礼申上げます。

○カブセ彫りの場合の板下の件、及び板下を刻工が適当に彫改めるとの御高説、もっと詳しく御数示願ひたいもので御座います。

○見立——古俳諧の常道にて大変参考になりました。

※

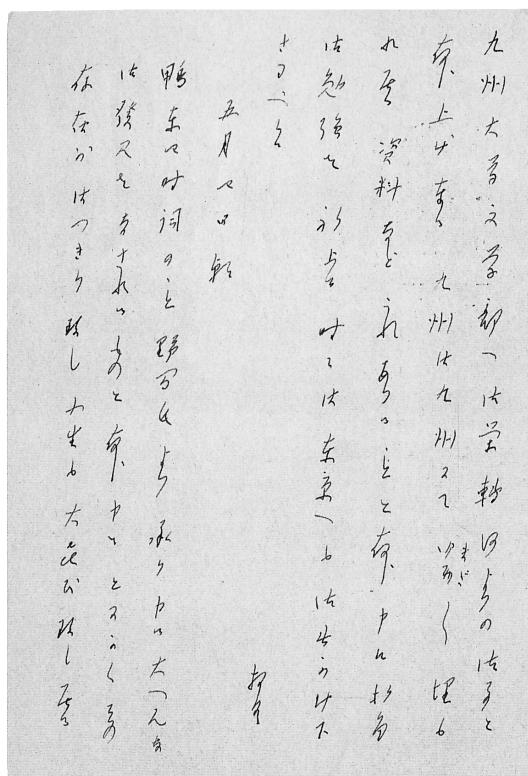
(一) (二) (三) の葉書き、木村先生の場合、余りにも謙譲が過ぎて、却って恐縮してしまうのだが、先生は結構茶目つけたっぷりであられたようだ。特に大学の先生に対しては、その茶目つ気が利き過ぎて、有名な源氏物語の先生が来館された時は、その写本の貴重さを懸命に証明しようとなさる時に、オヤ、私は「けむしものがたり」とあるので、何か毛虫の話かと思っておりました」と仰言って相手を煙に巻いておられたと、誰かの話にうかがった事がある。

そんな先生に「冬の日」などの架蔵本を送りつけるなどという不遜な事をしていたのだから、今更ながら、穴があつたら入りたい程の気持ちでいる。

(二) は横山重先生へ返璧を頼まれたものらしく、そんな走り遣いの様な事もやっていたものと思う。(二) と (三) は「冬の日」へ

の御礼状と先生の考察、また(四)は先生による板木の縮み工合などを参考に、もしかしたら刻工が板下を彫改めるような事もやっていたのではないかという、ほんの思いつき程度のこと。

森銑三先生 (一)は葉書、(二)は封書で枠外に青インクで「森」と刷られたもの。



(一) 葉書

九州大学文学部への御栄転何よりの御事と存じ上げ奉候。九州は九州にてまだまだ埋もれ居候資料などこれあり候ことと存じ申候。折

角御勉強を祈上候。時には東京へも御出かけ下さるべく候。拝具

五月四日朝

鴨東四時詞のこと野間氏より承り申候。大へんな御発見をなされ候ものと存じ申候。とにかくその存在がはつきり致し、小生も大喜び致し居候。

(二) 封書

拝啓、この度は「洒落本・滑稽本・人情本」の大冊御惠贈に預りありがたく存じ奉候。未だゆつくり拝見することも致しかね居候状態に候へども、遊子方言に就きて御研究を進めさせられ居るを相知り、喜びに堪へず候。七篇中四篇まで南畝と京伝との作が二篇ずつ収められ居候こと、これまた私には喜ばしきことに御座候。ざつしりと詰まつた御注釈、御労苦のほど察し上げ奉候。

洒落本に就きては私などこれまで一向に知ること乏しく候へども、まだまだ究明を要すべき問題の多々これあり候こと、なほ今後の御研究の御進展を期待仕りと存じ申候。

山東鶏告のこと、わざとぼんやり御書きに相成候へども、京伝はその人物より考へ候ても、ありもせぬ人物を作中に載せたりするやうな人にはこれあるまじくと存じ居候。

何かと追はれ居候て、御礼が遅延に及び御許し下されたく候。またまた日比谷図書館にても、ひょつくり拝眉を得たくと存じ居候ことに御座候。略儀ながら御礼までに御座候。拝具

五月二十四日朝 森銑三

中野様

※

(一) は野間先生に松本の二階で見つけた鴨東四時詞を御送りした所、野間先生から森先生へ、それを報じられたものと思う。その代り野間先生からは甘雨亭叢書中の稀本、徂徠の「飛驒山」を頂戴した。

森先生からの御手紙には本のことと、人物伝のことしか伺ったことがないような気がしている。「遊子方言」研究のことは、それ以前に確か申上げていたと記憶する。しかし此方もそれ以上は詰め兼ねていた時もあり、先生も、もう一つ証拠が欲しいねと言われたように思う。